

オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽

中村 威也・小川 快之・仁藤 智子

はじめに

二〇二〇年早春より蔓延し始めた新型コロナウイルス（COVID-19）のために、多くの大学の授業が遠隔（オンライン）授業となった。遠隔授業では対面授業とは違う不便さもあり、教育的に限界も見られるものの、逆に対面授業より優れていると思われる点もあり、そうした点は今後対面授業が全面的に再開されても活用してもよいのではないかと考えられる。

ところで、筆者仁藤・小川は、学生の学習意欲や理解力の向上のために比較文化史の研究手法を用いた実験授業を行いたいと考え、日本史と東洋史の合同授業を二〇一八年度から始め、今回で三回目となる。初回は宮廷女官をテーマに授業を行い、その内容を検討し、その教育的効果や課題点について論文にまとめた^①。

さらに、昨年度は筆者中村も加わり、宮廷音楽をテーマにして合同授業を行ったが、準備不足があったため、その内容を再度練り直して、今年度も音楽をテーマに合同授業を行うこととした。昨年度の反省から、主旨を明確化するために王権との関連について掘り下げることとし、早い段階で今回のテーマは「音楽と王権」と設定してみ

た。音楽とは人々の生活と切り離せないものであるが、歴史的な手法から、国家が形成・展開していくなかで、王権・国家が音楽をどのように利用してきたのか、という側面に光をあてることとした。

また、実施方法についても、冒頭でも触れたように、今年度は特別の配慮を必要とした。対面授業が行えないなか、新しく導入されたオンライン会議システム（Zoom）を利用して、日本史と東洋史の合同授業を行ってみようと考えた。事前の教員の勉強会や打ち合わせもすべてこのシステムを利用した。そして、Zoomの画面共有機能によるパワーポイント教材の提示、YouTubeやbilibiliなどの動画視聴サイトを活用した音楽の再現、さらに「チャット」「投票」「ブレイクアウトセッション」の機能が、学生の授業に対する主体的な参加を促すのに効果的であると考えられたため、これらを活用することにし、これらの教育的効果の検証も今回の実験授業の目的としてみた。

以下、本稿では、以上のような経緯で二〇二〇年度に国士舘大学文学部でオンライン授業により実施した日本史・東洋史合同授業「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」での試みとその教育的な効果について考察してみたい。

一 実験授業「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」の概要

本章では、まず、今回の実験授業の内容について説明しておきたい。今回の授業では、「音楽とは何か」、東アジア世界に国家が形成されて、展開していくなかで「音楽とはどういう存在であったのか」を考えていくことに焦点を当てて、授業を構成してみることにした。

授業は、二〇二〇年一〇月一三日（火曜日）四時限、二〇日（火曜日）四時限の二回にわたり実施した。参加者

は、考古・日本史学コースの三年次仁藤ゼミ（日本史演習1）の十一名と、東洋史学コースの三年次小川ゼミ（東洋史演習1）・四年次中村ゼミ（東洋史演習2）、及び上記ゼミ以外の東洋史学コースの参加希望者を合わせた計七名で、一二日の参加者は十五名、二〇日は十八名であった。^②

授業の構成は、第一回目に第一部と第二部の中国編を実施した。第二回目は、冒頭三〇分程度を使い、前回の復習ということで第一部と第二部の要点を確認した上で、第三部の日本編を実施し、さらに学生の意見のまとめを使った総括を行った。

また、事前に第一部から第三部のレジュメ（A4サイズ数枚。重要語句は空欄になっているもの）を、本学で採用している教育支援システムの manaba にアップしておき、さらに第一回目終了後に重要語句を記入したレジュメも確認としてアップし、第一回目の欠席者にも内容を確認してもらうように指示した。

さらに第二回目終了後に第三部のレジュメ（重要語句記入済のもの）を確認としてアップした。当日の講義ではパワーポイント（スライド）を主に使用しながらレジュメの内容を説明し、第一部と第二部では YouTube・bilibili 上の動画も適宜活用した。なお、東洋史学コースでは、両日欠席者のために、manaba に第二部の OneDrive 上の動画の URL も示しておいたところ、加えて数名の参加が見られた。

二 実験授業「オンライン授業で考える中国と日本の王権と音楽」の講義内容

ここでは、さらに第一部から第三部の実際の講義内容について再現してみたい。講義の様子をリアルに伝えるために、Zoom に録画した動画も参考にして、あえて口語調のままにしている。

『第一部 中国における音楽の誕生と王権（担当：筆者中村）』

さて、「音楽」とはいつたいなんでしょうか。現代の私たちも音楽を聴いていますが、古代の音楽はどういうものだったと思いますか。第一部では、中国で「音楽」が誕生した時に、どのようなものとしてとらえられていたかを正しく理解し、続いて「音楽」と社会・政治権力（王権）との関係について考えていきます。

紀元前六〇〇〇年頃の新石器時代には、^{けん}壺という楽器がすでに登場しています。土で作られたオカリナのようなもので、ド・ミ・ソの三音を出すことができました。紀元前十六世紀の殷代には、^ち簫と呼ばれる横笛が出てきます。これは、ド・レ・ミ・ソ・ラの五音階を出すことができました。

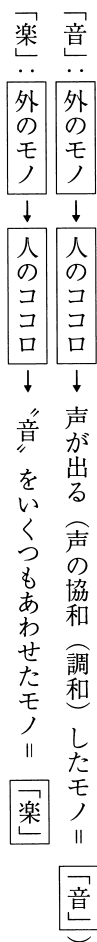
ド・ミ・ソ、和音（C）と呼ばれる三音で、聞いていて気持ちが良いものです。⁽³⁾古くから人びとは、心地よい音階を自然と知っていたことが分かるでしょう。このような「心地よさ」は、踊りとあわせることによって、神おろしの場でトランス状態を作り出していたと考える研究者もいます。つまり、音楽は、神とつながるためのツールであり、神を呼び出すことのできるものだと考えられていたのです。

紀元前七世紀の春秋時代に孔子が編纂したと伝えられる『詩経』は、中国最古の歌謡集で、さまざまな歌詞が残されています。そのうち、「頌」は周王朝の朝廷の祭祀に、「雅」は儀式や宴会に用いられた音楽で、各地の民謡を採用した「風」とは大きく異なります。「頌」や「雅」は厳かな雰囲気ですが、「風」は、地方で労働の際に歌われた俗っぽいもので、ラブソングもありました。

そのため、『論語』には「鄭声（鄭の歌声）が、雅楽（正しい音楽）を乱しているのを憂う」という言葉が残されています。今でいえば、クラシックのオーケストラが奏でる音楽が、人びとの俗っぽい歌声で台無しになり、年寄りたちが心配するといった感じでしょう。

さて、このようにさまざまな音楽が出てきた時代に、当時の人が「音」や「楽」をどう考えていたのか、『礼記』の記述から読みとってみましょう。

【スライドに『礼記』楽記篇を映し、二―三分作業してもらい、チャット機能で枠内の空欄に何が入るか、学生に答えを言ってもらった。】



外界の様子に応じて人びとが出す声が合わさり、その声に和音が重なったものが音であり、楽であることが読みとれたでしょうか。音楽は、外のモノ（とある世界・とある雰囲気）を、そしてそこから感じられる人のココロ（とある心情）を、表現したものだと考えられていたのです。

音を楽しむから「音楽」というのだ、という言葉に耳にしますが、本来は「音と楽」、あるいは「音の楽」の方が正しいのです。

音楽の生まれた時期では、音楽は、人びとが外のモノに心を動かされ、声となって出たものが源でした。このことは、きちんとおさえておきましょう。

紀元前五世紀、戦国時代になると、その状況が変わります。長江中流域に、「曾」という国がありました。一九七〇年代後半に「曾」の諸侯の墓である曾公乙墓そうこういつぼが発見され、そこから、大量の楽器が出土しました。

異なる音階の「鐘」をいくつも組み合わせたものを編鐘へんしょうといいますが、曾公乙墓からは見事な編鐘が出土しました（資料①編鐘参照）。驚くべきことに、その編鐘は隣同士の鐘の音の差が均一でした。「三分損益法さんぶんそんえきほう」という方法

によって、人工的に音を操り、一オクターブを十二に均等に分割して人工的に音を作り出していたのです。当時の

用語と現代の音階を並べると次のようになります。

宮、羽角、商、徵曾、宮角、羽曾、商角、徵、宮曾、羽、商曾、徵角

C, C#, D, D#, E, F, F#, G, G#, A, A#, B

それぞれ、いったいどんな音なのか、宮から順番に徵角まで、一つずつ音を出すので、見てください。⁽⁵⁾

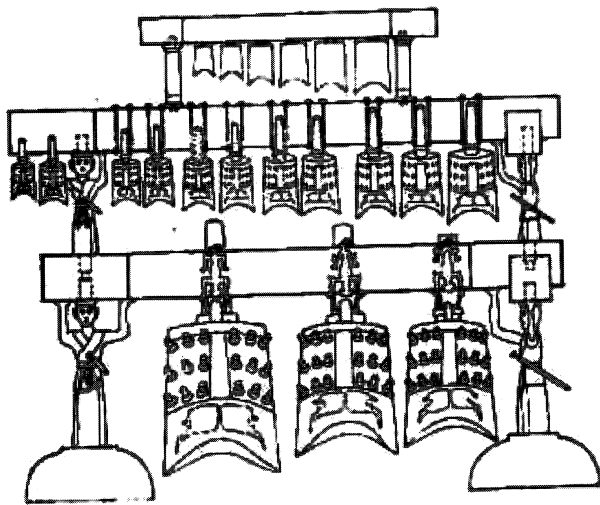
分かりましたね。中国では紀元前五世紀の段階で、現代のピアノの鍵盤のドから一オクターブ上のドまでの黒鍵を含む音のすべてを出すことができました。そして、編鐘全体では五オクターブ半という非常に広い音域を出すことができるようになったのです。

編鐘でどのような音楽が奏でられたのかは、はっきりしていませんが、『礼記』楽記篇で確認したことを踏まえれば、単音をつなげたもの（メロディーを奏でたもの）ではなく、メロディーとともに和音も演奏したものだったはずです。⁽⁵⁾

【曾公乙墓の編鐘（復元）を使った演奏を、二分間ほど視聴⁽⁶⁾】

このように、戦国時代になると、「戦国の七雄」と呼ばれる国家で中央集権体制が整えられるとともに、国家権力によって音楽が演奏されるようになりました。戦国時代は各国がしのぎを削る時代でもあり、下克上のはげしい秩序が安定しない世の中だったので、各国では、編鐘で均整のとれた秩序だった音楽を演奏し、あるべき秩序・あるべき世界を作り上げようとしたのです。

さきほど確認したように、音楽は、外のモノに影響を受けて、人のココロが動いた結果、声となったものが源でした。音楽から、あるべき秩序や世界を作り出そうとしたことも、外のモノを（秩序だった）音楽に置き換え、次のように説明できるでしょう。



資料① 編鐘『曾侯乙墓』（文物出版社、1989年）36頁、図37-2をもとに、筆者中村作成。

「莊嚴で」「秩序だった」音楽（「音」があわさった「楽」）⇨外のモノ
外のモノ⇨人びとのココロ（莊嚴で秩序だった）⇨（莊嚴で秩序だった）声が出る

古代の中国では、音楽や衣服や建築などの外のモノが、人びとのココロに作用すると信じられていたので、国家が理想とすべき社会を作り出すために「音楽」を利用し始めたことが分かるでしょう。

そのことを、統一王朝となった漢代を例に見てみましょう。漢代では「元会儀礼」と呼ばれる、年度初めの皇帝と家臣が同じ場所に揃って、年賀の挨拶をする重要な儀式がありました。この儀式は、主に以下の三つで構成されています。

一．皇帝に対して家臣が年賀の言葉を述べ、貢ぎ物を献上する。

二．家臣が皇帝に対し、「万歳」を唱え、「乾杯」をして宴会が始まる。

三．宴会をしている間、芸能と音楽が催される。

漢代の宮廷音楽は、一番重要な儀式において、君臣関係や上下関係を象徴する「貢ぎ物の献上」など儀式の最中ではなく、宴会の伴奏として演奏されたものでした。そこには、皇帝と臣下が飲食をともにすること、楽しみを分かち

合うことに主眼があり、上下関係・君臣関係をことさらに強調するものではなかったのです。

前漢・後漢時代は、朝廷や儀式で音楽が演奏されました。天地や山岳を祭る際の音楽は、神の世界と人の世界が調和的で秩序だったものであるようにと演奏されたのでしょうか。また、儀式で演奏される音楽は、朝廷内の秩序や儀式に象徴される秩序を、正しくするために演奏されたと考えられます。

しかし、前漢の武帝期までは、演奏された音楽は「鄭声」（民間の音楽）であって「雅楽」（正しい音楽）ではありませんでした。そのため、神や祖先を祀る際の音楽（郊祀・廟楽）・宴会の際の音楽（燕楽）・行軍の際の音楽（軍楽）が新たに作られました。これらの音楽は（広い意味で）「雅楽」と呼ばれ、以後は朝廷で民間の音楽を演奏することは禁じられました。

このことから、前漢では国家や社会の秩序維持を目的として音楽は使われていないことが分かります。では、いつ頃になって、そのような目的のもとで音楽が利用されるようになったのでしょうか。それは皮肉なことに、雅楽の伝統が失われた晋代以降でした。

後漢末の混乱から西晋末の永嘉の乱によって、漢代の国家体制や祭祀の知識・器物は、楽器そのもの、演奏する人、（楽譜はなく口伝されていた）音楽そのものが、ほぼすべてなくなってしまうました。後の王朝では、国家で行う祭祀や楽器を、漢代の祭祀が記された書物だけから復元しなければならなかったのです。同時に、王朝の初期には、国家を中心とした中央集権体制の構築が必要とされたので、音楽を復元するとともに、儀式的なかの雅楽が持つ意味が、より重要に、より国家寄りになっていきました。

そのことを晋代の「元会儀礼」で見てみましょう。晋代の元会儀礼では、皇帝の登場から音楽が演奏され、先に紹介した一・や二の要所要所で雅楽が演奏され、その場面のあるべき秩序（上下関係・君臣関係）を強調する役

割を担うようになっていきます。

このようにして、国家の儀式と音楽が整備され、君臣関係を強調する仕組みを保ったまま、唐代へと継承されていきます。さらに唐代では、音楽だけでなく「舞踏」も、あるべき秩序・世界の表現として儀式のなかに取り入れられることになります。

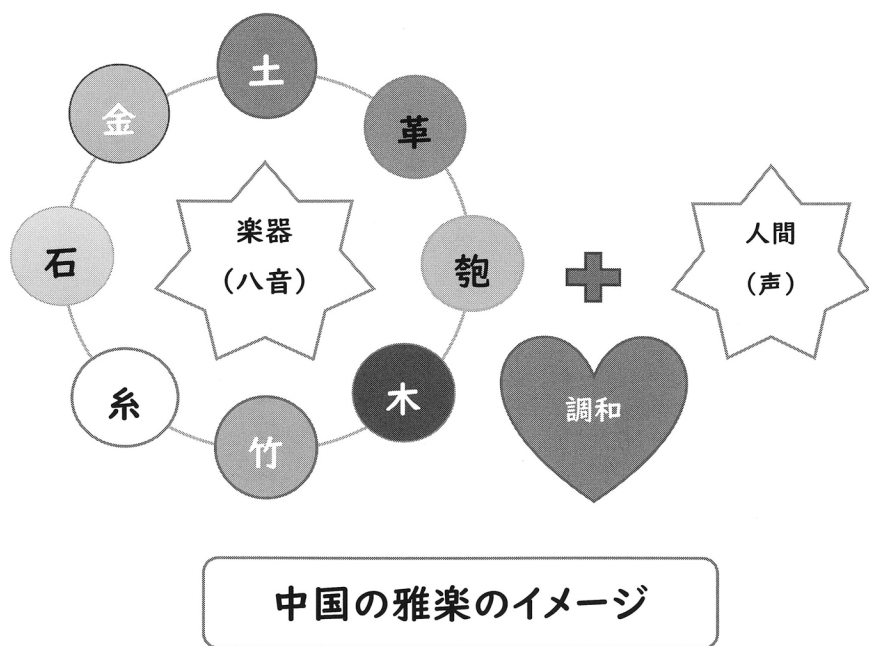
『第二部 中国と日本の王権と楽器（担当…筆者小川）』

第一部では、中国古代において音楽が人の心に作用すると考えられていて、和音やそれに人の声を合わせる事が重視されていたこと、それに基づく正しい音楽である雅楽が、次第に上下関係・君臣関係による秩序づくりに使われるようになったことが理解できたと思います。では、その雅楽はどのような楽器を使つて演奏していたのでしょうか。第二部では、さらに楽器という視点から王権と音楽の関係について考えてみましょう。^①

中国の雅楽器は、八音^{はつおん}と言われる自然界の八種類の素材で作られた楽器を用いることになっていました。その楽器とは、①金、金属製の樂器、②石、石または玉で作られた樂器、③糸、絹糸の弦を張った樂器、④竹、竹製の笛類、⑤木、木製の樂器、⑥匏^ぼ（ふくべ）、ひょうたんなどを素材とした樂器、⑦革、牛の革^{かわ}を張った太鼓、⑧土、土を焼いて作った樂器のことです。

そして、歌手がこれらの樂器を使った演奏に合わせて歌を歌います。八音という異なる素材で作られた樂器による和音と人間の声が合奏することで、人の心を動かし、自然界と人間社会の調和を図り、あるべき秩序を人々に感じさせようとしていました。（資料②中国の雅楽のイメージ参照）

中国の雅楽器は、実は王朝により違いもあるのですが、以下では、主に使われていた樂器を八音ごとに、スライ



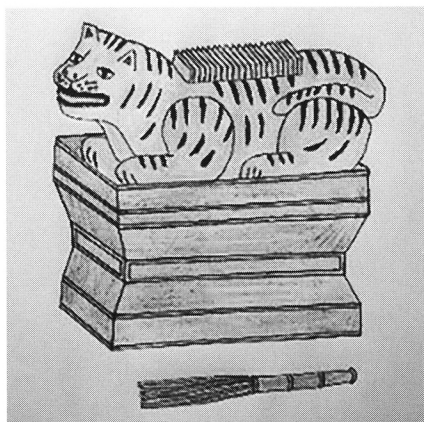
資料② 中国の雅楽のイメージ (作成：筆者小川)

ドを見ながら確認してみましょう。

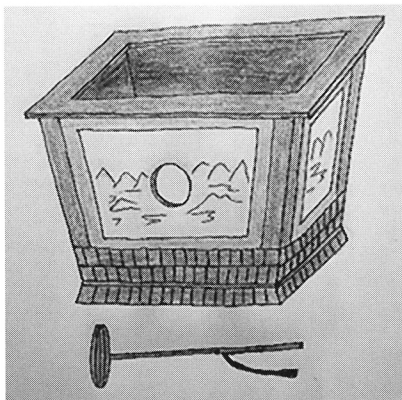
① 金、金属製の楽器とは、鑄鐘、はくしょう、そして第一部でも出てきた鑄鐘が連なった編鐘などです。② 石、石または玉で作られた楽器とは、特磬とそれが連なった編磬などです。③ 糸、絹糸の弦を張った楽器とは、琴(古琴)や瑟などです。音を調節する木製の柱という器具がないのが琴、あるのを瑟と言います。

④ 竹、竹製の管楽器とは、簫や排簫、篳などです。簫は縦笛です。排簫は、下の端をふさいだ長さの異なる複数の竹管を一行に並べて、上の端を吹き鳴らして演奏する楽器です。篳は第一部でも出てきました横笛です。

⑤ 木、木製の楽器とは、柷や敔などです。(資料③柷、資料④敔参照) 柷は、四角い箱状の楽器で、棒で叩いて演奏します。演奏の開始を知らせる時に使います。敔は、伏した虎の形をしています。背にあるぎざぎざを竹製の籊



資料④ ^{ぎよ} 鼓 (後掲『中国音楽再発見〈楽器篇〉』
53頁などの資料を参考にして筆者小川
が作成)



資料⑤ ^{しゅく} 祝 (後掲『中国音楽再発見〈楽器篇〉』
53頁などの資料を参考にして筆者小川
が作成)

という道具ですり鳴らして演奏します。演奏の終わりを知らせる時に使います。

⑥ 匏、ひょうたんなどを素材とした楽器とは、笙^{しょう}などです。笙は、円筒型のうつわの上に長短のある竹製の管を環状に立てたもので、吹いても吸っても同じ音が出る東アジア独特の面白い楽器です。

⑦ 革、牛の革を張った太鼓とは、鼓^こや搏拊^{はくふ}などです。鼓と言えば、太鼓のことです。搏拊は、皮革^{ぬか}に糠^{ぬか}を入れたもので、形が鼓に似ていて、手で叩いて演奏します。⑧ 土、土を焼いて作った楽器とは、埙^{けん}(埴)などです。埙は第一部でも出てきましたが、土笛のことです。

以上が、八音と言われる八種類の楽器です。ここで、動画でこれらを使った再現演奏を聴いてみましょう。なお、いくつか動画を見てもありますが、最後に行くブレイクアウトセッションでの作業で「中国の雅楽と燕楽を聴いてそれぞれどのように感じますか？ また、それぞれ音楽的にどのような効果を狙っていると思いますか？」という設問について考えてもらいますので、それに向けて、各自感想をメモしながら聴いてみてください。

なり。

【YouTubeの動画：中国の雅楽「詩経・鄭風・子衿」の再現映像（三分四十三秒）（簫、笙、瑟、鼓、編鐘、編磬、歌鐘、大鐘での再現演奏）を視聴した。】

ところで、雅楽は、皆さんも知っているように、日本にもあります。しかし、日本の雅楽で使われる楽器は、中国の雅楽の楽器とは大きな違いがあります。管楽器、打楽器、弦楽器の順に確認してみましょう。

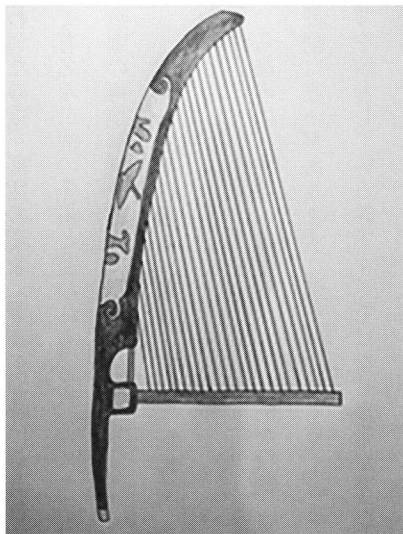
管楽器は、笙・箎・龍笛の三つがあり、これを三管と言います。笙は中国の雅楽にも出てきました。箎は縦笛で音量が大きいのが特徴です。龍笛は横笛です。

打楽器は、羯鼓・太鼓・鉦鼓の三つがあります。羯鼓はつつみのことで、二本のバチで両面を打って演奏します。この楽器は演奏の開始を知らせる役割を持っています。鉦鼓は青銅製の皿状の打楽器です。

弦楽器は、琵琶と箏です。箏とは、中国の雅楽にあった瑟の小型のもので、古箏とも呼ばれ、柱がつけられています。日本の琴の原型と言われています。中国の琴は、名前が同じですが、柱がないので別の楽器になります。ここでこれらを使った日本の雅楽の演奏を聴いてみましょう。

【YouTubeの動画：『雅楽「源氏物語」のうたまゝ』付録DVDより「管絃」（道友社公開版）（一分五十六秒）を視聴した。】

日本と中国の雅楽を比べてみると、中国と同じ笙などもありますが、箎、羯鼓、琵琶、箏などは中国の雅楽には見られません。では、なぜこのように違いがあるのでしょうか。その背景には何があるのでしょうか。実は、日本で使われる箎、羯鼓、琵琶は、中国古来の楽器ではありません。西域、つまり、中央アジア由来の胡楽器と呼ばれるものです。また、箏は、中国古来の楽器ですが、俗楽器と呼ばれるものです。



資料⑤ 豎箜篌 (後掲『中国音楽再発見〈歴史篇〉』
115 頁などの資料を参考にして筆者小川
が作成)

唐代には、シルクロード交易の発展などにもない、中国に胡楽器が沢山入ってきていて、今の中国ではほとんど演奏されませんが豎箜篌と呼ばれるハープもありました。(資料⑤豎箜篌参照) 琵琶などは唐代以降も残りましたが、豎箜篌は唐代以降廃れてしまいました。ここで豎箜篌の演奏も聴いてみましょう。中国三大石窟の一つである敦煌の壁画に書かれているものを意識して再現した動画です。

【YouTube の動画「：豎箜篌の演奏「青瑤×敦煌壁画箜篌」(琵琶奏者柳青瑤公開版) (三分五十三秒) を視聴した。】

では、こうした胡楽器や俗楽器はどのような時に使用されるのでしょうか。実は、唐代以降の宮廷音楽には、演奏する目的によって違いがありました。第一部でもお話がありましたが、宮廷音楽には、宮廷の祭祀や朝廷の儀式で演奏する音楽、宮廷の宴会で演奏する音楽、行軍の時に演奏する音楽などがありました。

そして、宮廷の祭祀や朝廷の儀式で主に演奏されたのが雅楽です。雅楽は宋代に再整備されて大晟楽と呼ばれ、さらに明代や清代にも再整備されて中和韶楽と呼ばれていました。⁽⁸⁾ 宮廷では、天地の神を祭る郊祀という祭祀、宗廟という皇帝の祖先を祀る施設や孔子を祀った文廟で行われる祭祀などがあり、そうした場所では雅楽が演奏されていました。

雅楽は、中国古来の楽器を使用して、胡楽器や俗楽器は使いませんでした。胡楽器、俗楽器が主に使

われたのは、宮廷の宴会（饗宴）の時に演奏される燕楽という音楽です。琵琶や三弦、現代の中国音楽の楽器として有名な二胡の先祖と言われる奚琴、カスターネットのような楽器である拍板や箏などがよく使われました。ここで燕楽の再現演奏を聴いてみましょう。

【YouTubeの動画：燕楽・唐曲「瑞鷓鴣」の再現映像（三分五十五秒）（琵琶、箏、豎箏篋などでの演奏）を視聴した。】

ちなみに、楽器にはそれぞれ社会的な役割（機能）に違いがありました。同じ弦楽器でも琴と琵琶では社会的な役割に違いがあります。例えば、琴を見てみましょう。「乾隆帝薫風琴韻図」という絵があります。清の乾隆帝が琴を演奏している絵です。ではなぜ皇帝が琴の演奏をしているのでしょうか。

実は、琴には特別な意味があります。昔の中国では、知識人であれば「琴棋書画」というものを身に着けておく必要があるとされていました。「琴棋書画」とは、琴、囲碁、書道、絵のことです。そのため、知識人は琴の演奏の練習を熱心にしていて、それは琴楽と呼ばれていました。琴の演奏には、「正しい心」を「養う」ための手段、精神修養のためという目的がありました。同じ弦楽器でも琵琶にはそのような役割はありませんでした。そうなので、皇帝も琴の演奏をしているわけです。

ところで、日本の雅楽では、どうして中国の雅楽器がほとんど使われず、胡楽器や俗楽器が使われるようになったのでしょうか。中国で皇帝たちが宮廷の祭祀や朝廷の儀式で雅楽を用いた理由についてもう一度確認した上で考えてみましょう。

中国では、秦の始皇帝以来、皇帝支配体制が基本的な政治体制になっていて、漢代以降、上下関係・君臣関係などによる秩序を重んじる儒教思想が皇帝支配を支える重要な政治理念となりました。渡辺信一郎先生の本などに

れば、儒教思想では、中国の皇帝たちは、天、昊天上帝こうてんという宇宙の最高神から命を受けて天下を支配していると考えられていたので、天の子、天子と言われます。そのために、自らの権力の根源である天地を祭り、宇宙の調和と地上世界（人間社会）の安定を図ろうとしたと言われています。^⑩

儒教思想では、礼（礼儀）によって外面から人間を秩序づけ、楽（音楽）によって内面から人間を秩序づけようとなりました。これを礼楽思想と言います。宮廷の祭礼では、こうした儒教的な礼楽思想により、正しい音楽である雅楽が演奏されてきました。つまり、皇帝支配を強化する手段として、雅楽が必要であったため、雅楽が宮廷の祭祀などで使われていたわけです。

ところが、古代日本の雅楽では、今確認したようにこうした儒教的な礼楽思想に基づいた雅楽器は使われず、胡楽器、俗楽器が多く使われています。では、日本で天皇たちが雅楽を演奏させた目的は何だったのでしょうか。そもそも、日本の王権と音楽の関係はどうなっていたのでしょうか。この問題については第二回目の合同授業の第三部で考えてみましょう。

【ブレイクアウトセッション】

さて、先ほどもお話しましたが、最後にブレイクアウトセッションを使った作業をしてみたいと思います。今、仁藤先生に日本史と東洋史合同のセッション（グループ）を作ってもらいましたので、皆さん、五分ほど時間をあげますので、設問の答えをメンバーと考えて、代表の人を選んで、発表してみてください。設問は、「中国の雅楽と燕楽を聴いてそれぞれどのように感じますか？ また、音楽的にどのような効果を狙っていると思いますか？」です。当時の人々になった気分を考えて、グループのメンバーと話し合ってみましょう。

【ブレイクアウトセッションの結果と教員のコメント】

皆さんの感想の内容をまとめてみると、雅楽については、静かさがあり、厳肅で厳かな感じで環境音楽的で緊張した感じがする。つまり、人の心を秩序へと導く傾向を感じる人が多いですね。一方、燕楽は、メロディーが分かりやすくリズムカルで、明るさや楽しさがある。つまり、人の心を嬉しくし、気分を高めていると感じる人が多いですね。燕楽は、私たちが楽しんでいる一般の音楽と同様に芸術性を感じさせ、ある意味、楽しむことを目的とした音楽と言えますが、雅楽は、儒教思想・礼楽思想を重視した音楽で芸術性を考えた音楽ではありません。そのため、皆さんの印象や推測はだいたいあっていると思います。

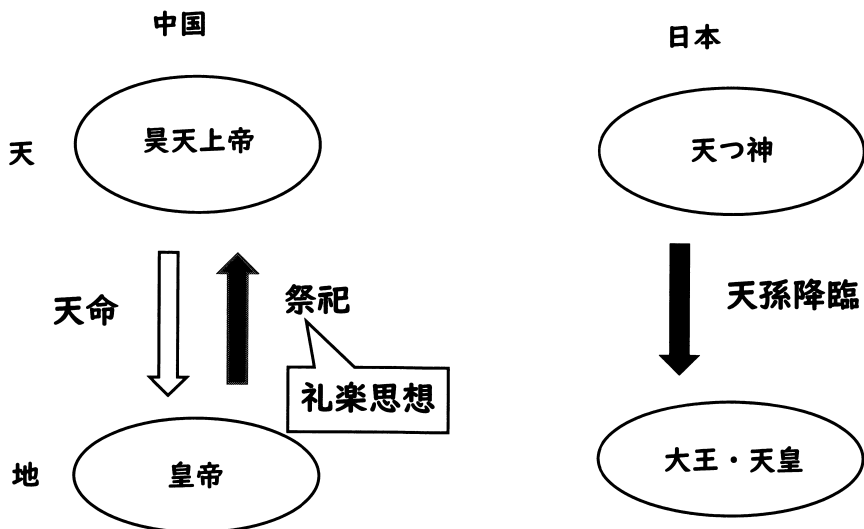
【第三部 日本の王権と音楽（担当…筆者仁藤）】

〈一〉王権の在り方の違いと音楽

第一部では中国における音楽の発生と王権との関係を、第二部では楽器という視点から王権と音楽の関係を見てきましたが、第三部では、舞台を日本に移して、日本の王権と音楽との関係、音楽の持つ歴史的意義について考えていきます。

日本の特色を考えるにあたって、中国と比較していくと、よりその共通性や独自性が浮かび上がってきます。比較研究という手法です。中国史研究者の渡辺信一郎さんが、注目すべき指摘をしています。古代社会において、日本と中国での音楽の在り方の違いは、王権の由来・正統性の説明の仕方の違いに起因するのだ^①というのです。

具体的に、見ていきますと、【資料⑥中国と日本の天下概念図】のようになります。第二部で説明があったように、中国では皇帝は天すなわち昊天上帝という宇宙の最高神から命を受けて統治をおこなうことが許されると考えられます。所謂、天命思想といわれる説明の仕方ですが、皇帝の支配統治の正統性は、昊天上帝の権力委譲による



資料⑥ 中国と日本の天下概念図 (作成：筆者仁藤)

と考えられています。ですから、皇帝は、自分に支配統治を命じた昊天上帝を受権者として祀らなければ、自分の正統性を示すことができません。なので、昊天上帝を祀る祭祀が大切であり、そこに音楽と礼を結びつけるのです。これが儒教の「礼楽思想」と呼ばれるものです。よって、音楽は皇帝の祭祀にとってなくてはならないものとなったのです。第一部と第二部のお話を思い出してください。

一方、日本の王権は、天孫降臨によって語られます。つまり、天から降臨した子孫が地の支配統治をおこなう大王・天皇になるわけです。血の論理で繋がっているの、中国のように祭祀を行って、天との関係を内外に可視化しなくてはいけません¹²。そのため、支配の正当性を示す場としての祭祀は無用になり、天地祭祀を中心とする礼楽制度は、日本では受容されなかったと考えることができます。そのため、祭祀で奉納される唐の雅楽は継受されず、儀式や祭祀が終わった後の饗宴の場で演奏される、燕楽や散楽といった、中国では下級と思われる

る音楽が日本には伝来し、雅楽となったのだというわけです。

渡辺さんの指摘は、日本と中国における王権の在り方の違いから、音楽に対する姿勢の差異を説明するもので、正鵠を得ているといえるでしょう。

では、日本古代には、燕楽という饗宴つまり宴会の時の音楽しかなかったのでしょうか。またその音楽は中国から伝来したものしかなかったのでしょうか。次にそのことを考えてみましょう。

《二 埴輪は何を語るか》

次の【資料⑦】を見てください。埴輪です。いずれも北関東の群馬県の古墳周辺から出土した、豊かな表情と動作を持つ人物埴輪です。何をしているかわかりますか？

【チャットを使った全員の作業Ⅱ簡単な問い（アイスブレイク）】

チャットを使って、三枚写真の人物が何をしているのか答えてください。（約一分）

「琴・弦楽器・太鼓・打楽器」といろいろな意見が出ました。一枚目と二枚目は、琴（きん）をひいています。三枚目はどうでしょう。

左…埴輪 太鼓を叩く男子（群馬県伊勢崎市境上武士出土、古墳時代・六世紀）

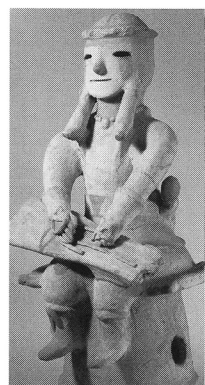
中央…埴輪 片手を挙げる女子（群馬県伊勢崎市下触出土古墳時代・六世紀）

右…埴輪 鼓を打つ人物（群馬県伊勢崎市境上武士出土古墳時代・六世紀）

真ん中の女子が発声しています。左右の男子が太鼓や鼓など打楽器を演奏しているようです。どうやら、六世紀の「いきものがかり」のようですね。



資料⑦群馬県伊勢崎市出土埴輪（東京国立博物館 HP・「親と子のギャラリー 博物館で音楽会」より）



瓦塚古墳出土埴輪（国指定重要文化財・群馬県伊勢崎市 HP より）

『ブレイクアウト・セッションⅡ第一回目とは異なるグループ』

ここで、ブレイクアウトセッションをしてみたいです。問題は、「この埴輪から日本古代ではどんな時に音楽が奏でられたと考えられますか？」です。埴輪が再現しているのはどんな場なのか、さらに埴輪は埋葬された古墳の主の何を、あるいはどんな行為を再現しようとしているのか、考えて話し合いをしてください。セッションが終わりましたら、グループの意見を取りまとめて発表してもらいます。それぞれ発表者を決めておいてください。（約五分）

『ブレイクアウト・セッションの結果と教員のコメント』

グループ①は「神や古墳の主を称えるため」、グループ②は「祭祀儀礼。権力者を称えるため」、グループ③は「古墳の主の権威を称えるため。仏教伝来以前であるが、死後の生活を楽しくする、死者との別れを悲しむ、惜しむ意味があるため」、グループ④は「祭祀儀礼。大王と神への儀礼・祭祀のため」、グループ⑤は「豊作を祝うため。死者を弔うため。権威を称えるため。」ですね。皆さんは「死者を悼む」ことを重視していますね。古墳という場所であることを考えると、埋葬主を悼む葬礼のためとも考えることができますね。しかし、一方で、生前の埋葬主である地方首長が行っていた

光景を再現したものととらえるとなると、首長の仕えていた「大王への儀礼」とも考えることができそうです。このことを考えるために、次に記紀に琴がどのようなものと観念されていたかを見てみたいと思います。

《三 記紀にみる王と琴》

『古事記』や『日本書紀』には、大王が琴（キン）とかかわる話があります。その中から、今日は二つご紹介しましょう。

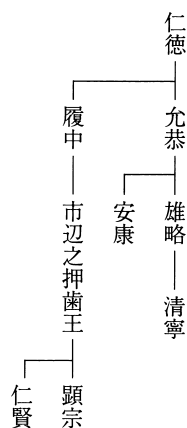
（例 1）

オオクニヌシはオホアナムチと名乗っていましたが、根の国を支配しているスサノオの娘であるスセリビメと結婚し、スサノオから出された難題を妻の英知で乗り越えます。妻とスサノオのもとを逃げ出す時に、「生太刀ナマタチ」「生弓矢ナマユミヤ」「天の沼琴ヌメコト」を盗みだしますが、琴が鳴ってスサノオに追われます。命からがら逃げたオホアナムチは、天下を統治する力を得たということです。ここで「天の沼琴」はスサノオの大切な宝物、権力の象徴として出てきます。¹³

（例 2）

また、大王雄略の子、清寧が亡くなると大王位空位の時期ができました。その時、大王履中の孫である二人の皇子が発見され、顕宗・仁賢として即位します。

【系図1】



発見の場となったのは、播磨国で行われた有力者の新築祝の宴でした。貧しい身なりの兄弟が次のように舞をして、歌ったのです。

「〔前略〕八絃¹⁴の琴を調ぶるごとく 天下を治め賜へるイザホワケ 天皇の御子市辺之 押菰王の 奴末¹⁵なり」

八絃の琴を奏できるように天下をお納めになった^{キミ}（大王履中）の御子市辺之押菰王の子で、今は奴となった私、とうたったのです。ここで「八絃の琴をしらぶる如く 天下を治めたまへる」と大王の統治を例えること¹⁴です。

これらの例からわかることは、琴が大王あるいは大王の統治に直結して語られるということです。大王への服属を示す儀礼として歌舞が奏上¹⁵されます。渡辺さんは触れていませんでしたが、日本において音楽は、古くは服属儀礼としても存在していたのです。服属儀礼ですから、服属を受ける大王や首長は「聴く王¹⁶」として君臨しなければなりません。

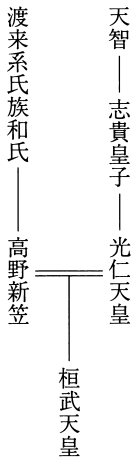
その後、六世紀には朝鮮半島から新羅楽・百濟楽・高句麗楽など多様な歌舞が入ってきますし、八世紀かけて唐

や渤海からさまざまな雅楽が入ってきました。大王は常に国内的にも、対外的にも統治支配をするものとして「聴く王」としての立場をまもっていったのです。

《四 「聴く王」から「奏でる王」へ―帝王学としての音楽》

ところが、平安時代―九世紀―に入って大きく変わることになります。中国から入ってきた音楽が雅楽として整備されたのもこの時期です。音楽と王権の在り方を考える上で、大きな画期となったのが、桓武天皇の時であったと考えられます。桓武天皇自身が、楽器を奏でたという伝承は残っていませんが、桓武天皇の息子である嵯峨天皇とその弟淳和天皇は、琴（キン）の名手として記されています。五世紀に雄略が琴を弾くのは意味合いが違い、「中国風の天皇として演奏」したと考えられます。「延暦寺蔵「桓武天皇像」を揭示」この桓武天皇の肖像をご覧ください。これは、後世に作られた図像ですが、中国風の冠、衣装をまもっています。一般に、奈良時代や平安時代の天皇を描く際に、衣冠束帯という日本の衣装をまもって描かれます。ここからも「中国風の天皇」として、後世まで認識されていたことがわかります。平安初期以降、大陸から入ってきた帝王学としての礼楽を実践するものという形で君臨しようとした、桓武天皇の姿勢が大きく関わってきます。桓武天皇は、自らの出自のアイデンティティを母方の大陸に求め、積極的に中国大陸の習慣や文化を取り入れました。

【系図2】



特に、昊天上帝を祀る祭祀である天帝郊祀を催行したことは注目されます¹⁸。先ほどの、渡辺さんの理論を援用すれば、受権者としての昊天上帝を桓武天皇自らが祀るということは、自らの王権を天命思想のもとで正統化したことに他ならないのです。今までの大王や天皇が用いた「天孫降臨」という血筋による正統性ではなく、新たに中国の天命思想を用いた、あるいは用いなければならなかったということは注目すべきことです。そのため、桓武朝以降、王権を支える要素として雅楽の本格的な導入と整備がなされていきます。

このような歴史的な転換を背景にして、音楽を「聴く王」から「奏でる王」へ大きく転換したといえます。この転換は重要な意味を持つようになり、帝王学としての音楽の教授・継承が起きてくるようになります。

次に、帝王学としての音楽がどのように継承されたのか、奏でる楽器を基に考えてみましょう。豊永聡美さんのお仕事¹⁹に基づいて、楽器の変遷を見ていきましょう。

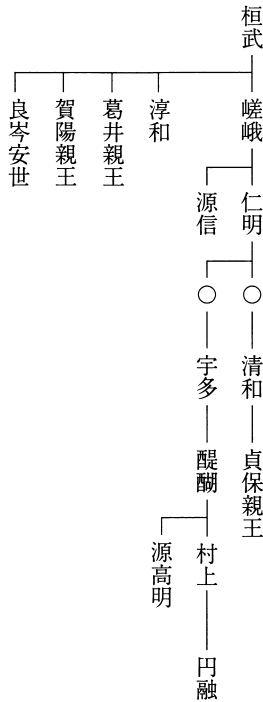
(二) 琴の時代

桓武天皇の息子の一人である嵯峨天皇は、『和琴血脈』²⁰に見える和琴技芸の相伝系図の筆頭にあげられています。皇子源信へ和琴を教授した記事のほか、桓武皇子の葛井親王、賀陽親王、良岑安世も琴に通じたことが知られます。次いで、嵯峨の異母兄弟に当たる淳和天皇です。淳和は、嵯峨より宝琴を賜与されたことや群臣の前で和琴演奏を披露したことが史料に記されています²¹。さらに、嵯峨の子供の仁明天皇です。仁明は『文机談』巻第一「天皇御学事」に見えるように、和琴の習得に励む一方で、大戸清上や藤原貞敏らを等に派遣して琵琶・笛を習得させた²²とも伝えられています。

この仁明朝において楽制の改革が行われたことも特筆すべき事柄です。荻美津夫さんの研究によれば、仁明朝に

は、それ以前に入っていた雅楽が集成されて、今日に近い形に整えられたとされます。左方が唐楽（唐楽・林邑楽）に、右方が高麗楽（高句麗楽・新羅楽・百濟楽・渤海楽）という左右両部制が採用され、使用される楽器が淘汰され整備されます。舞楽演奏形式が整備され、雅楽寮だけでなく衛府樂人が生まれ、後世の樂人という家業が芽生えてきます。多くの樂曲が作られ、盛んに披露されるようになります。このように、音楽を担う基盤そのものが大きく変容し、整えられたのです。荻美津夫さんはこれを「雅楽の和風化・国風化」といっています²³。

【系図3】



このほか、清和天皇・宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇と九世紀から十世紀前半の天皇まで琴を嗜んだことが知られています。文学作品の『うつほ物語』は、王権の継承と琴の伝承をめぐる大河ドラマですね²⁵。

（二）笛の時代

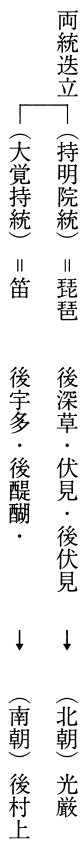
やがて幼帝が出現すると、楽器も小型のものが好まれるようになります。笛は幼児にも習得しやすかったとみえ、摂関期・院政期に爆発的に人気をさらうようになります。幼帝として即位した円融天皇をはじめとして、一

条・堀川・鳥羽・二条・高倉などが笛を愛好したことが伝わります。また、後白河院は催馬樂などの「声技」を、その子二条天皇は、笛のほか琵琶にも造詣が深かったといっています。

(三) 琵琶の時代

治承寿永の内乱（いわゆる源平合戦）以降、「もののふの時代」が到来を告げるようになると、力強い楽器が好まれ、『平家物語』が琵琶で弾き語りされた例を出すまでもなく、宮廷でも広がっていきます。承久の乱をおこした後鳥羽天皇以降の鎌倉時代の天皇は、琵琶を愛好したことが知られています。さらに時代がおりて十三世紀の鎌倉時代中期に、膨大な皇室財産を形成していた荘園群が分割相続され、天皇位も後嵯峨天皇以降に両統に迭立されるようになると、持明院統の後深草天皇以降は琵琶を、大覚寺統の後宇多天皇以降は笛を相伝するようになります。

【系図4】



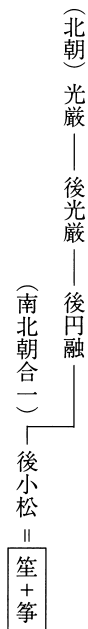
王統によって天皇の楽器が異なるようになるのは、イエ意識の成立⁽²⁷⁾とも関わり興味深い現象ですね。

(四) 笙の時代

十四世紀は、鎌倉滅亡、建武の新政、観応の擾乱と政権が目まぐるしく変わります。その中で、北朝の後光厳天

皇以降、笙が持てはやらされるようになります。特に、南北朝を合一した後小松天皇は、笙と琴を嗜むになります。十世紀に琴と笛が好まれていたのと、対照的ですね。

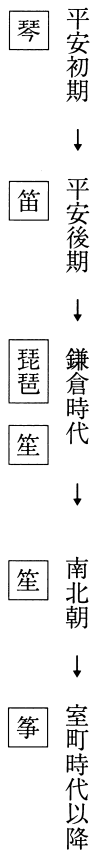
【系図5】



(五) 箏の時代へ

十五世紀以降、すなわち室町時代以降は、箏が大手舞台に立つようになります。

このように、荻さんや豊永さんなどの研究⁽²⁸⁾を基に桓武天皇以降に成立したと考えられる帝王学としての音楽と楽器のたしなみをまとめてみましょう。平安初期以降、帝王学として天皇が修得し、奏でた楽器は



と変遷してきたことになります。平安初期以降の王権にとって、音楽は帝王学の一部として、時代と共に楽器の傾向は変化するものの習得され、しばしば「奏でる王」として歴史に残ったのですね。

【全体のまとめのブレイクアウトセッションの内容】

最後に学生に「音楽とは？」の「？」に当てはまる言葉とその理由をメンバーと考えてもらい代表者に発表

させた。各グループの回答は、

グループ①は「国内統治。政治利用されていたから。」

グループ②は「思想を表現して人の心を動かすためのもの。」

グループ③は「権力。人の精神面を動かすから。」

グループ④は「人間。聴覚によって、人間の意識・無意識を操作し、支配するから。」

グループ⑤は「祈願。音楽を媒介として、人の心に影響を与え、「お願いの気持ち」を感じさせるから。」

となった。そして、学生全員参加の投票（Voonの無記名投票機能を利用）で、優等賞はグループ②とした。また、教員が相談して、健闘賞はグループ④とした。

三 授業アンケートの結果の分析

アンケートは、第一回目の授業終了直後の一〇月一三日より、第二回目の授業が終了したのちの二五日までとし、manabaのアンケート機能を使って行った。以下では設問ごとに学生の回答について分析してみたい。なお、欠席者となるは、両日とも欠席し、教材のみにより回答したものである。

【1】授業全体を受けてみて、授業のテーマや内容に興味を持ちましたか？

この質問には、「はい」（日本史…十一名、東洋史…七名）、「いいえ」（日本史…〇名、東洋史…〇名）との結果となり、全ての学生が授業のテーマや内容に興味をもっていることが分かり、学生にとって、「中国と日本の王権

と音楽」という比較文化史を用いた今回のテーマは興味をひくものであったことが確認でき、このことからテーマ設定は問題なかったと考えられる。

【2】授業の内容について、興味を持ったことや気になったことを書いてください。（自由記述）

《第一部》

日本史の学生の回答より…「音楽を楽しむ、と書いて「音楽」じゃない。」というのが初めて知って、面白かったです。音楽によって、神とつながるという点も興味深く学ばせてもらいました。」「西洋ではバッハを起点に発展してきた和声学があるが中国においては、そのはるか昔から研究がされていたということは驚きである。また音階（音程）の発見は数学者ピタゴラスであることは有名であるが、中国においても同様に発見されたのならば、当時の中国の数学の発展も考えられると思って面白いと思った。」「（中国の）戦国時代に全ての音階を発することができ楽器が完成していたという話を聞いて音楽の神秘性を感じた。」「音階が初めは三音だったのに対し戦国時代には十二個の音階で絶対音階を作り出すことが可能になったという点が、音楽もまた発展していったという経緯が分かり興味深かった。」「音楽は、神とつながるツールであるということです。」「チャットも使って考えた、外のモノ、人のココロ、声、音の流れが印象に残りました。」「現代とは音楽の価値観が違ふと感じました。現代では軽視されがちな音楽というコンテンツですが秩序や国家のために扱われていた音楽を学ぶと、現代でも使われる「音楽は世界を変える」という言葉が今まで以上にしっくりくるなと感じました。中国以外にもこのような音楽での改革を扱おうとした国があるのか気になりました。」「戦国時代に現れた「編鐘」の音階は、どのくらいの時間をかけて完成させたのかです。」

東洋史の学生の回答より…「音階に着目することは考えたこともない視点だったので面白かった。」「音域が五オクターブ半もあったことが驚きでした。」「中国では、紀元前から多くの音をあらわすことができ、政治の中でも多く取り入れられていたことが分かり、面白いと思いました。」「音楽によって神とつながることや、秩序を強調する役割だったことが興味深かったです。」「音を楽しむと書いて音楽ではないということ、そして音楽が上下関係や君子関係を強調する役割を担っていたことについて気づかされました。」「現代の音楽は娯楽として楽しむものであるが、古代中国における音楽というのは「楽しむ」というより「見えない何かを音楽で表現する」と感じた。この授業を通じて、古代と現代の音楽の在り方の差異を知ることができた。」

ここから、講義のポイントである、音楽が現代とはまったく違う意味で存在していたことや、音階についての説明や音楽が政治的な機能を果たしている点が学生にほぼ正しく伝わり、さらに意外性をもって受け止められ、驚きや知的な刺激となっていたことが確認できる。また、学生にとってはあまり身近ではないはずの「王権と音楽」というテーマではあるが、思いのほか、テーマに沿った回答が寄せられた。

第一部では、通常のパワーポイント画面での説明のほかに、**④**画像（曾公乙墓の編鐘）、**⑤**画面の共有（バーチャルピアノを使った音階の説明・実演）、**⑥**動画視聴（曾公乙墓の編鐘を使った演奏）**⑦**チャット機能（教員の問いかけで史料を読み解き、学生がチャットで回答）も導入した。

通常の講義では、教室で画像・映像を見せても、画面にピン트가あいにくかったり、ピン트가あっても、学生の目には小さく見える。しかしオンライン授業では、目の前のパソコンの画面に画像や映像が映し出される。学生と画面の距離はきわめて近く、学生の視野に占める画面の割合も大きい。こうした条件では、学生は普段よりも強く視覚や聴覚を刺激されたに違いない。「意外性」や「驚き」や「知的な刺激」という反応は、まさに多くの刺

激を受けたことによるコメントであろう。

つまり、オンライン授業では、④⑤⑥ともに、教室での講義よりも、よりビビッドに学生に内容が伝わる特徴が指摘できよう。

また、④のチャット機能の利用では、はじめのうちは講義担当の筆者中村がヒントを出しても、なかなか答えを全員が見ることのできるチャットに出す学生はいなかった。しかし、一人の学生がチャットで意見を出すと、次から次へと他の学生も回答しだした。こうしたことは、教室での講義でもよく見られる光景である。

今回は、これらの回答について筆者仁藤がコメントを返し、学生が気づいていない点に注意を向けさせたり、的確なコメントを返すことにより、一度回答を出した学生がさらに回答をし直すなど、学生がさらに深く考えて答えを導こうとしている様子がうかがえた。

一人でオンライン授業を進行する場合では、なかなか一度にたくさん来る回答を的確にさばききれないことが多いが、今回の複数の教員による合同オンライン授業だったからこそ可能であった。教員側が互いをサポートすることで、円滑なオンライン授業ができた好例であろう。

《第二部》

日本史の学生の回答より…「楽器の素材に拘りをもつというのが面白いと思った。……自然界（世界）を構成する要素というものは世界中で関心が持たれていたが、自然界と人間の調和を図るのであれば、その素材に拘りを持つのはたしかに当然だと思った。」「音楽は国民の心に語りかける道具として使われていたという印象を持った。」「雅楽で使用する楽器が中国のものと日本のものとは大きく異なることや、祭祀や儀式において雅楽を用いた背

景に儒教思想が考えられることなど、楽器からその時代の特徴を知ることができ興味深かった。」「日本の雅楽で使われる楽器の原型が、中央アジア由来のものであったことです。」「音楽というものが人々の娯楽などのためにある訳ではなく、自然界との調和や秩序を表す物であったのは新たな認識となりました。」「雅楽と燕楽の違いをみんなで話し合って違いを見つけたことが印象に残った。」「音楽に何の意味を持たすのかという点について、中国では儒教の教え、儒教思想を扱っていましたが、日本でも時代は変わりますが、「踊念仏」のような教えを音に乗せて扱うものが他にあるのか気になりました。」「雅楽と燕楽は、どちらが演奏される機会が多かったのかです。」

東洋史の学生の回答より…「音楽を使って人心の掌握を図るという点が興味深く、他の時代も同様のことが行われていたのではないかと興味がわいた。」「皇帝支配を強化する手段として音楽を使おうとした歴史自体が面白いと思います。」「音だけでなく、見た目でも様々な種類の楽器があり、視覚的にも作用するものではないかと思いついて興味を持ちました。」「皇帝支配を強化する手段として雅楽が必要というのが、現在の使用方法とは異なるなと感じた。」「中国の雅楽器の八音は他の国で使われることがあったのか。唐代以降の宮廷音楽は、……使用する楽器に込められた思いなどはあったのか気になりました。」「演奏する目的で使用する楽器が変わるのは興味深かった。また、雅楽と燕楽を比較すると、演奏の仕方やリズムが異なるので音楽が作る雰囲気的重要性を改めて感じた。そして、中国の音楽は「権力の表現」の一つとして用いられていることが分かった。」

ここから、講義のポイントである「皇帝支配を強化する手段」という現代とは異なる音楽の役割が学生に興味深く感じられたことが分かる。第二部でも、第一部に引き続き、**④ 画像**、**⑤ 画面の共有**、**⑥ 動画視聴**、がより直接的に学生に伝わり、それが講義内容の興味や理解につながっていることがうかがえる。また、スライドで具体的に楽器を確認したことにより、「視覚的にも作用するものではないか」とのコメントもみられ、「中国の雅楽器の八音は

他の国で使われることがあったのか。」など違いも意識したさらなる興味も生み出している点が確認できる。

第二部では、㉔で、雅楽と燕楽という異なる音楽を試聴させ、その違いを、㉕ブレイクアウトセッションという、Zoomの機能を用いて学生に任意のグループの中で議論させ、その結果を発表させる取り組みを行ってみた。同じ国、同じ時代にも、雅楽と燕楽という実際に視聴して違いが分かるほど異なる音楽が存在したということをし、学生は実感したのであろう。

教室で、ブレイクアウトセッションのような少人数による話し合いをする場合、学生は往々にして恥ずかしがったり、意見を述べるまで時間がかかったりすることがある。ただし、今回は、顔が見えないこと（後述するように、これにはマイナス面を感じた学生もいた）、四人前後のグループで議論するため発言せざるをえないという、オンラインならではの仕組みが、多くの学生には効果的に働き、講義内容についてより一層の理解・比較・検討を促す結果をもたらしたと考えられる。

《第三部》

日本史の学生の回答より、「埴輪が音楽を奏でているということは少なくとも古墳時代から日本に音楽が存在していたと考えられ、音楽の歴史は古く長いと感じました。」「帝王学としての楽器があるなら、逆に名手であるがゆえに地位を上げた者もいるのだろうかと思った。」「日本では音楽は儀礼としての役割を持っていたことが分かった。音楽の使い方が国によって異なることから音楽は国家のアイデンティティのようなものでもあると思った。」「埴輪からも当時の音楽について知ることができ面白かった。また、中国と日本の音楽を比較した際に礼楽思想や天孫降臨など考え方の違いが、それぞれの国の音楽に反映されているという点が興味深かった。」「音楽に関しても

桓武天皇から大きな改革がみられることです。」「楽器を持った埴輪の写真が出てきた時に、やはり音楽は古来より人々の生活に深く関わってきたのだなと感じました。」「画統迭立の時代にそれぞれの楽器が違うことです。」「古代から中世になったときに聴く王から奏でる王になったことに興味を持ちました。」「本当に楽器を持っている埴輪があり、……当時の日本を読みとるのにつかわれるものとは思いませんでした。音楽とは、良くも悪くも人の心を動かせる道具なのだとは私は感じており、演奏する際に使われる道具が時代ごとに移り変わるのとはなぜかと疑問に思いました。」「日本と中国の統治者の在り方の違いによって、音楽の用途が大きく違うのはとても面白いと思った。日本と中国の「雅楽」という言葉の捉え方が音楽性を通してわかるのは興味深いと思った。」「

東洋史の学生の回答より…「中国では地位が低いとされた音楽が日本で重宝されたというのは興味深く、文化の伝道の過程を詳しく知りたいと思った。」「比較したのが良かったです。」「国の成り立ちで受け入れられる音楽の形態が変わるというのが非常に面白いと感じました。」「日本では、音楽は服属儀礼として存在していたと言うところに興味を持った。」「古代中国における音楽は昊天上帝を祀るものであるが、日本は大王への服属を示すものであり、思想の違いからそれぞれの音楽の在り方を知ることができた。しかし中世になると、中国的要素を積極的に取り入れ「帝王学としての礼楽」を実践しており、時代の変遷で音楽の在り方も変わると言うことが分かった。」「時代とともに天皇が弾いていく楽器が異なるところです。」「

ここから、講義のポイントである中国と日本の音楽の背景の違い、また、時代による楽器の変化について、学生が正しく理解して関心をもったことが確認できる。また、埴輪の史料としての活用法への気づきも見られ、研究法の学習にもなったことが分かる。

【3】あなたはどのくらい授業の内容を理解できたと思いますか？

第一部 おおむね理解できた（日本史…五名、東洋史…三名）・まあまあ（日本史…六名、東洋史…三名）・わかりにくかった（日本史…〇名、東洋史…一名）

第二部 おおむね理解できた（日本史…七名、東洋史…五名）・まあまあ（日本史…四名、東洋史…二名）・わかりにくかった（日本史…〇名、東洋史…〇名）

第三部 おおむね理解できた（日本史…六名、東洋史…五名）・まあまあ（日本史…五名、東洋史…二名）・わかりにくかった（日本史…〇名、東洋史…〇名）

ここから、講義内容は、設問【2】の結果と合わせて考えると、第一部から第三部まで、ポイントとなる事項も含め、多少の個人差はあるが概ね学生が理解できる範囲のものであったことが確認でき、内容のレベルはほぼ学生の状況にあっていたことが分かる。パワーポイント（スライド）の使用、レジユメの manaba での配布という形式も学生の理解の助けとなり、その活用にはほぼ問題がなかったと考えられる。

【4】授業のやり方についてお答えください。

①チャットを使った作業は効果的と思いましたか？

はい（日本史…十名、東洋史…六名）・いいえ（日本史…一名、東洋史…一名）

②ブレイクアウトセッションを使った作業は効果的と思いましたか？

はい（日本史…十一名、東洋史…六名）・いいえ（日本史…〇名、東洋史…一名）

③YouTubeなどの動画の活用は効果的と思いましたか？

はい（日本史…十一名、東洋史…七名）・いいえ（日本史…〇名、東洋史…〇名）

ここから、チャット・ブレイクアウトセッション・動画視聴の活用についてはほとんどの学生が効果的であったと感じたことが確認できる。なお、YouTube 動画については欠席者二名も効果的であると回答している。

【5】今回のオンライン授業のやり方についてお答えください。

① 今回のオンライン授業は、あなたが理解を深めるのに役に立ちましたか？

はい（日本史…十一名、東洋史…七名）・いいえ（日本史…〇名、東洋史…〇名）

この項目は全員が役立ったとしており、今回のオンライン授業が学生の理解の助けにかなりなったことが確認できる。

② 今回のオンライン授業は、一般の対面授業と比べて、どのような点が良かったと思いますか？（自由記述）

日本史の学生の回答より…「話し合いをするさいにブレイクアウトセッションでグループ分けがしやすいのが良かったと思います。」「対面の場合は事例を説明して終わってしまうことがあるが、今回のオンライン授業ではその事例を直接映像を用いて説明していた点です。」「チャットの機能が誰でも発言しやすくて良いと思いました。」「パワポがとてよく見えたことです。」「チャットなどを使うことで発言もしやすく、投票機能も使うことで人数を数える時間も省かれるのでとても良いと思います。」「簡単に投票ができ、匿名である点です。」「他の学生と積極的に話せるところです。」「チャット機能は、誰が何を発言したかが残るので便利だと思った。」「

東洋史の学生の回答より…「顔が見えていない相手と話し合うのは難しかった。」「座る位置によつての格差がないところです。」「移動せずに行うことができ、スライドや動画も対面授業と比べて見やすい画面だったので、良い

環境で受けられる点が良いと思います。」「チャットでコミュニケーションができる点です。」「ブレイクアウトセッションを行う際、グループ分けは対面授業だと時間がかかってしまいがオンラインだと容易にでき色んな人と意見交換がしやすい。そのため、非常に効率が良いと感じた。また、チャット機能があるので状況に左右されずに質問ができたり、作業を行えるので良かった。」「動画を用いて分かりやすく説明したところです。」「

これを見ると、視聴環境の良さ（「パワポがとてよく見れた」「座る位置によつての格差がない」「見やすい画面だった」）、質問や作業のしやすさ（「状況に左右されずに質問ができたり、作業を行える」）、話し合いのしやすさ（「発言しやすくて良い」「積極的に話せる」「オンラインだと容易にでき色んな人と意見交換がしやすい。そのため、非常に効率が良い」）を感じる学生が多く、オンライン授業の有用な面が具体的に確認できた。

これを教室での講義と比較して考えると、教室では物理的に画面や教員からの距離があり、視覚や聴覚の点からすると、どうしても「集中」を妨げられる要因が少なくない。その点、オンライン授業では、即座にグループ分けが可能であったり、動画が目の前で視聴できたり、効率よく無駄がなく講義を進めることができる。そのため、学生も一定の集中を保つことができ、講義内容の理解に繋がる、ということであろう。

一方で、顔を出さずに参加する学生もいたため、「顔が見えていない相手と話し合うのは難しかった。」と、オンラインでの意見交換に不安を覚えた学生の意見もあった。この点は今後活用する場合には、ブレイクアウトセッションの時はビデオをオンにしてお互いに顔を見せ合うことにするなど、何らかの対策が必要であると考えられる。

【6】今回の授業は、東アジアの歴史や文化を学ぶ上で刺激になりましたか？

はい（日本史…八名、東洋史…五名）・まあまあ（日本史…二名、東洋史…二名）・いいえ（日本史…〇名、東洋

史…〇名）＊日本史無回答一名

ここから、今回の授業が、東アジアの歴史や文化を学ぶ刺激におおむねなっていたことが確認できる。

〔7〕授業全体についての感想やさらに知りたいと思ったことなどを書いてください。（自由記述）

日本史の学生の回答より…「僕は機械が苦手なのであらかじめチャットの使い方を教えて欲しかったです。ブレイクアウトセッションで東洋史の学生と話し合いができて良かったです。音楽という実技科目が…歴史学に関係があるのは僕の中で考えたことがなかったので、とても新鮮で面白く興味深い授業でした。歴史学は単に文献の史料を使うのではなく、今回の音楽のように広い範囲の学問だと改めて学ばせてもらいました。非常に有意義な授業でした。」「音階や音程が出来ていたことはわかったが、西洋式の音階と比較して周波数がどの程度違うのか知りたいです。」「音楽と政治思想を結びつけることはとても画期的であり、面白いと思った。…今回の合同授業は古代史の研究手法をさらに深く学ぶ良いきっかけになったと思う。…古代の日本、中国で音楽の使われ方が異なっていたことから分かるようにその国や時代によつての考え方や価値観は異なる。歴史学において比較検討の重要性を考える良いきっかけになったと思う。」「ブレイクアウトセッションで日本古代史だけでなく東洋史の人の意見も聞き、自分とは異なる視点からの考えを聞くことができて面白かったです。」「YouTubeを使うことは効果的だが、音質の悪さが目立ってしまっていた。音楽に関しての授業なので、その点が少し残念だった。」「音楽とは古来より人々の生活の中に深く関わっており、ただ単に娯楽の意味があったわけでは無く、音楽にもそれぞれ用途やランクがあり自然や秩序をかたどっていたというのは新たな認識となりました。合同授業自体も新鮮でとても楽しかったです。」「途中で動画があつてよかったです。」「合間にブレイクアウトセッションやチャットでの回答があり、飽き

ずに授けることができました。」YouTubeでの音楽の鑑賞はとても分かりやすく、良いと思いました。やはり音質が悪いため、URLなどを張り付けていただければ個人で聞けるのでは、とも感じました。調べたことのない単元であり、私自身……古代での音楽、楽器に関して、考えたことがなかったことを認識できたので、もし卒論の途中、……今回の授業を思い出し役立てていきたいと思います。」「楽器や音楽が進化、発展していった過程、をもっと細かい時系列で知りたいと思った。」

東洋史の学生の回答より……Zoomでの授業は初めてだったので慣れないことが多く難しかった。顔の見えない、面識のない人と話し合うのは苦勞した。音楽はどの時代も人の心を動かす道具になりうると思ったので、音楽が人々に与えた影響を色々な時代で詳しく知りたいと思った。」「ブレイクアウトセッション、そんな方法があることを知らなかったので楽しかったです。」「戦中に使われた楽器はどのように使われ変化していったのか、知りたいと思いました。」（欠席者）「音楽にはそれぞれ意味があり、使われる場面も物によって全く違うことが分かりました。西洋の楽器はどのようにして中国や日本に受け入れられていったのかも知りたいとおもいました。」「今回は古代から中世の音楽がメインだったので、近代の音楽についても知りたいと思いました。その音楽にどういう意味があったのか、どういう楽器が使用されたのかについて考えることは楽しいと感じました。」「今と昔の差異を考えるのは興味深いと感じた。また、歴史はそこに存在する事実の背景を考える学問なので、今回「音楽」というなじみある分野であるが考える機会が少なかったので興味を持って取り組めた。今回は、古代～近世を中心に学んだので他の時代（近代等）やヨーロッパ等の他の国の音楽の在り方も比較して考えるのも面白いと感じた。」「年に一度の合同授業なので、今年はどんな内容でやるのか毎年楽しみにしていました。」「朝鮮半島ではどうだったのか知りたいです。」（欠席者）

これを見ると、「こういう楽器が使用されたのかについて考えることは楽しい」「音楽」というなじみある分野であるが考える機会が少なかったので興味を持って取り組めた」といった感想があり、設問【1】での肯定的な結果などと合わせて考えると、改めて今回の講義に学生が「興味を持ち」「楽しく」受講できていたことが確認できる。

「王権と音楽」というテーマは学生にとっては、もしかするとやや難しいテーマではないかとも思われたが、学生にとって心理的に「身近な音楽」をテーマに含み、オンライン授業により実際の演奏を目の前のパソコン画面で物理的にも「身近に」視聴したことが、学生の積極性や主体性を引き出したのではないだろうか。他の時代、色々な時代で音楽や楽器はどうだったのか、他の国ではどうだったのか比較してみたいという声は、今回のオンライン授業の、中国における音楽と王権、中国と日本の楽器と王権、日本における音楽と王権という三つの場面での王権と音楽を比較検討した内容を、他の地域や他の時代に学生があてはめて考えていると思われる、この点も非常に意義深く思われる。

また、「自分とは異なる視点からの考えを聞くことができて面白かった。」「ブレイクアウトセッション、そんな方法があることを知らなかったので楽しかった」という感想もあり、設問【4】の②の結果などと合わせて考えると、初めてブレイクアウトセッションに参加して楽しく感じる学生もいたことが分かる。さらに比較文化史を用いた合同授業自体も「比較検討の重要さを考える良いきっかけになった。」「新鮮でとても楽しかった。」「毎年楽しみにしていました」との感想があるように、好意的に受けとめる学生がいることも分かる。

そして、「音楽が人々に与えた影響を色々な時代で詳しく知りたい」「西洋の楽器はどのようにして中国や日本に受け入れられていったのか」「近代の音楽についても知りたい」「朝鮮半島ではどうだったのか知りたい」といった

感想があるように、講義内容に触発されて、さらに他の時代や他の地域の状況も知りたくなったことが窺え、設問【6】の結果と合わせて考えると、今回の授業が学生の刺激になっていたことが改めて確認できる。

おわりに

本稿では「王権と音楽」をテーマとしたオンライン授業での日本史・東洋史合同授業の教育的効果について授業アンケートの結果を分析しながら考察してみた。

その結果をまとめてみると、比較文化史の手法を用いた合同授業については、設問【1】で全員が肯定的な評価をし、感想でも「新鮮」「楽しみ」との肯定的なコメントがあり、前回同様、その有用性が再確認できたため、こうした形式の授業は今後も試みる価値があると考えられる。「学生にとって少しでも身近に感じられるテーマを含める」「事前学習などを行って身近に思えるようにする」「作業をさせたり議論をさせる」など一方通行でない仕組みを用意することなどで、教育的効果はより一層高められるのではないかとと思われる。

また、オンライン授業については、チャット機能、ブレイクアウトセッション、YouTubeなどの動画視聴の活用は設問【4】でどの機能に対しても大多数が肯定的な評価をし、設問【5】の①で全員が今回のオンライン授業は理解を深めるのに役立ったとしていることから、その有効性が確認でき、チャット機能は状況に左右されず質問できる点、ブレイクアウトセッションは他の学生と積極的に話せる点など利点も判明したため、今後の授業でもそうした点も踏まえて活用した方がよいと考えられる。

オンライン授業が有効である点については、すでに指摘したように、教室での講義では物理的な距離が存在し、

学生の視覚・聴覚の双方に集中の維持が困難な要素がある一方で、オンライン授業は、目の前のパソコン画面とのやりとりが中心なので、集中を維持しやすい、あるいは学生の調子やリズムを崩すことなく受講できるという利点が指摘できる。

もちろん、通常の講義をただオンライン授業にただけでは、一方的な講義をオンラインにするのと変わりなく、いくらパソコンの画面が目の前にあったとしても、集中は維持できないだろう。

今回のオンライン授業の実践が示しているように、**④**画像の提示、**⑤**画面の共有、**⑥**動画の視聴、などを用いて、学生に一定の集中を保ったまま受講する仕組みや工夫を用いる必要がある。とりわけ**⑥**の効果が大きかったことは注目してよいのではないだろうか。

さらに、**①**チャット機能、**②**ブレイクアウトセッション機能を使うことにより、教員と学生の相互方向のみならず、学生同士というベクトルをオンライン授業に加えることができた。そして、その教育的効果を実感できたことは、今回のオンライン授業の実践における大きな収穫であった。

ただし、チャット機能で使い方が分からず戸惑う学生もあり、十分な効果を上げるためには、今後、同様の授業を行う場合は、事前に機能についての説明や練習をする必要があるだろう。また、ブレイクアウトセッションでは、顔を見せない（見せたくない）学生もいたため、顔が見えていない相手と話し合うのは難しいと感じる学生もあり、ブレイクセッションではビデオ機能をオンにして顔を見られるようにするなど、これについても十分な効果を上げるためには何らかの工夫をする必要があると思われる。

さらにYouTubeなどの動画については音質の問題も指摘され、その原因の背景にはパソコン環境やサウンドの設定などの問題もあると思われるため、欠席者用に後日行ったYouTube動画のURLのmanabaへの掲載を当日

も併用するなど、改善を試みる余地があると考えられる。

今回、合同授業とオンライン授業の有用性が確認できたため、その利点や問題点を踏まえて、今後また新たなテーマで実験授業を行い、その有効性や課題について検討してみたい。

註

(1) 小川快之・仁藤智子「東アジアの宮廷女官をテーマとした日本史・東洋史合同授業の教育的効果について」(『国士館史学』二四、二〇二〇年)。

(2) 昨年度は、二〇一九年二月二四日に実施。詳細は、以下を参照。

https://www.kokushikan.ac.jp/faculty/letters/news/details_14354.html
また、本年度については、以下を参照。

https://www.kokushikan.ac.jp/faculty/letters/news/details_15222.html

(3) Musica のバーチャルピアノ (<https://www.musicca.com/jp/piano> 二〇二〇年一月一日最終確認) で、ドミンを同時に鳴らし、実際に学生に聞かせた。

(4) 筆者中村は講義の担当中ということもあり、学生の回答にコメントする余裕がなかったが、複数の教員がオンライン授業を協力して実施する場合、役割分担をあらかじめ決めておくことが重要であると気づかされた。たとえば、Zoom では、画面の共有の切り替えや音声を伴った動画の画面共有には、どうしてもある程度の時間が必要となる。講義担当者が行う場合、講義の流れが一時的に止まってしまったり、うまく音声も流れているのか確認がとれないことが多い。この点については今回は反省すべき点があった。使用するソフトの習熟度によるが、動画視聴の画面共有は他の教員が行うといったサポートは、円滑なオンライン授業を行い、オンライン授業の利点を最大限に活かす上ではきわめて重要であろう。

(5) Musica のバーチャルピアノ (<https://www.musicca.com/jp/piano> 二〇二〇年一月一日最終確認) を用いて、ピアノの鍵盤でひとつひとつ音を鳴らし、学生に見て聞いてもらった。ドから順番に、黒鍵も含めて右に一つずつ鳴らし、一オクター

ブ上のドの一つ前のシで終わる音である。

- (6) 曾侯乙編鐘演奏表演 (https://www.bilibili.com/video/BV1Qs41s7dY/?spm_id_from=333.788.videocard.1 二〇二〇年十一月一日最終確認) の八分二十八秒から十分二十五秒あたりまでの二分間。はじめの一分間は、一人が演奏しているだけだが、あとの一分間は複数の人がメロディラインではない、和音を出しているのを見てもらい、そのことについても視聴中に学生に説明しておいた。

- (7) 瀧遼一「中国音楽再発見〈楽器篇〉」(第一書房、一九九一年)、同「中国音楽再発見〈歴史編〉」(第一書房、一九九二年)、吉川良和「中国音楽と芸能」(創文社、二〇〇三年)、渡辺信一郎「中国古代の楽制と国家——日本雅楽の源流——」(文理閣、二〇一三年)、松浦晶子「五代から北宋雅楽の楽隊編成」(『上智史学』五七、二〇二二年)、同「宋代宮廷音楽史再考——編鐘の形状改変を中心に——」(『東洋学報』一〇〇三、二〇一八年)、同「人間たちの和解——日・中・韓、東アジア音楽史の視点から——」(上智大学ティヤール・ド・シャルダン奨学金二〇二二年度受賞論文) 等参照。

- (8) 雅楽は、唐宋変革期に崩れ、北宋時代に新たに再整備・拡張された。さらに明代と清代にも楽器や楽曲が再整備された。宋代の雅楽については従来復古的で衰微したとする見解が多くみられたが、近年は見直され、新たな雅楽への変化と見る見解が出されている。松浦晶子「日本と中国における北宋雅楽研究の動向……一九八〇年代から二〇一〇年代まで」(『上智史学』六二、二〇一七年)、万依「清中和韶樂考辨」(『故宮博物院院刊』一九九二年第三期) 等参照。

- (9) 前掲吉川「中国音楽と芸能」参照。

- (10) 前掲渡辺「中国古代の楽制と国家——日本雅楽の源流——」。

- (11) 前掲渡辺「中国古代の楽制と国家——日本雅楽の源流——」。

- (12) 妹尾達彦「第十講 都城時代の誕生」(『グローバル・ヒストリー』所収、中央大学出版部、二〇一八年、二三頁)。

- (13) 『古事記』上巻・大國主神根の堅州國訪問の段。

- (14) 『古事記』下巻・清寧天皇の二皇子の舞の段。

- (15) 西本香子「古代日本の王権と音楽」(高志書院、二〇一八年)。

- (16) 豊永聡美「天皇の音楽史……古代・中世の帝王学(歴史文化ライブラリー)」吉川弘文館、二〇一七年)、同「中世の天皇と音楽」(吉川弘文館、二〇〇六年)。

- (17) 『和琴血脈』（『続群書類従』第十九輯上 管絃部 卷五三三）。本書は、綾小路敦有（一三三三—一四〇〇）が記した楽書。和琴技芸の和琴の相伝系図の筆頭にあげられている。
- (18) 『続日本紀』には、延暦四年十一月十日と同六年十一月五日に、長岡京の南郊にあたる交野で、郊外祭天を挙げたことが記されている。
- (19) 前掲豊永『天皇の音楽史・古代・中世の帝王学（歴史文化ライブラリー）』。
- (20) 前掲『続群書類従』第十九篇所収。
- (21) 『類聚国史』 卷七十七 琴条・天長四年十月戊申条など。
- (22) 岩佐美代子『文机談 全注釈』（笠間書院、二〇〇七年） 十四—十六頁。
- (23) 荻美津夫『雅楽——宮廷儀式楽としての国風化への過程』（『岩波講座日本音楽・アジアの音楽』二、一九八八年、同『古代音楽の世界』高志書院、二〇〇五年）を参照。
- (24) 高橋文室麻呂が、仁明・文徳・清和・光孝天皇に琴を教授したことは、『三代実録』貞観六年二月二日条にみえる。清和は、琴だけでなく、琵琶や笛も修行したことが、前掲の『文机談』に記されている。さらに、清和皇子貞保親王である「管弦の長者」と称されて、琵琶を宇多皇子敦実親王や醍醐源氏の源高明などに伝授したことも知られる。
- (25) 前掲西本『古代日本の王権と音楽』など。
- (26) 幼帝については、拙稿「幼帝の出現と皇位継承」（歴史学研究会編・編集責任加藤陽子『天皇はいかに受け継がれたか』續文堂出版、二〇一九年）及び二九頁・表を参照されたい。
- (27) 新田一郎「讓位の制度化」（『天皇はいかに受け継がれたか』續文堂出版、二〇一九年）は「家」のパッケージ化と評しており、帝王学として楽器の伝承を考える上でも興味深い指摘である。
- (28) 荻美津夫『平安朝音楽制度史』（吉川弘文館、一九九四年）、前掲豊永『天皇の音楽史』及び同『中世の天皇と音楽』。